



1451
七

長崎夜話卅五

附録

○長崎土産物

○唐様畫師 第一唐様彩色也 又南蠻紅

毛油繪乃風と傳へる者あり世東の圖を

くは長崎畫師を根本とて周碩生傳の

異國人直傳して用碩の唐風生傳の變流

かりし又生傳の彫物名人也今は傳へ

○眼鏡細工 鼻目鏡 遠目鏡 虫目鏡 敷目鏡

礮目鏡 透間目鏡 近視目鏡 長崎任人

長崎夜話五

淡田派兵衛といふもの壯年れは蠻國へ後で
眼鏡造り様と習ひ他人ありて生島藤七と
いふ者よ教つて造る志ありたり今これの
傳たり此派兵衛の武藝の達者細工れと
ありし弟を淡田新藏といふ其の蠻船
系より世襲と因襲と折節日本に東南海
たり大人阿母到りていふ者也友人其
其を渡りて武勇の働ありしに依りて徳國より
高祿を招かれり其志の事ありて仕官
せりてあり其後兄の派兵衛死す弟

新産肥後へ五百石を納りたり

○硝子 是れ蠻人長崎を教つて造る初
より今其傳流絶ど還りけり今いよ
と成りてさぬこれ器物紅毛の細工よ勝
扱けいといふるよ造る白石他國よはたれた石
かり長崎通と海邊にあり茶磨石乃字
活り中りぬ不思議の事たり

○土壘細工 唐人の自鳴鐘と書目本とてい土
景と書ても可なり今時計と書い字體
りかいつと小教あり 枕土系 根付土系

乃きぐい皆え来南蠻國より傳く其の家
傳今なり不絶

○天文道具色々 日尺 星尺 圓規 日晷

渾天儀 星圖 地球圖 世界の丸

右の真鍮とて造る物あり本とて他とるもわり

○真鍮細工色々 唐様彫物器物の類或は南

蠻印毛笄の風俗を似せたり於金銀細工か

か

○象眼鐔 くんと 勅次を根本とし其祖蠻國より後

アそ傳へ本わり漢南鐔も本蠻俗と傳へ

くろ者なりとせ

○唐金鑄物 花入 卓香爐乃類皆唐風也

根本道助といふ者廣東國へ海より習ひ傳へたり

○塗物道具 堆朱 屈輪 沈金 青貝 色蒔繪

種々器物皆唐風 堆朱は七部七膳とてり

○花手拭 南蠻傳 花鳥乃形と志がはるる

そのわり長崎舟一人の外に造る者あり

○深唐紙 并紋唐紙 皆地色青紅黄又龍

色又水色桃之種々あり地紋色々切落入り

あり

○造花

根平唐人より傳へり多く蠟花
として又望める所の通草とありて造る物あり
生花ぬるべしといふこと見りまじし通草の

長崎とてぬらふ本とて俗よと灯をとり

○線香

根本五端一官とて者福列より傳へ来
りて長崎とて造り初め人より教へるより漸く

學へり五端一官又子同名とて線香造りし

子一官とて後清川某と日本名を改て四姓

爺と友とて福列へ往し者也茶考に記と

○唐風佛工

方三官と元祖と寸三官ハ福建

道漳列の人とて佛工の妙手なり其男子二人

皆又乃傳伝得たりとて佛工の甚身を

勞し又其心と用家事深くさる所の靈像

全た事を得と慈いみ又の名と辱しめん

よりいとて又死して後つる佛工を授けり

男の醫術を好む人を患む次男も醫を

好む人と好むる多し二人共々學才あり

次男の師より書伝能く草書傳はりて

より今七十餘歳程存命あり三官乃作

の福濟禪寺乃は堂の本尊觀音の像別

其作かり長五六尺其容儀端正なり其地乃像小異なり此亦同一同作なり此像甚く靈驗ありて唐人いひ及ん長崎に唐人敬慕し常に糸指緒として祈願者甚く乃袋を取人多く皆靈驗ありてしるす

○珠數 唐風色に望次第 紫且 黒且

白且 護神香 降神香 吹玉 色々

○石印彫刻 唐様 唐人 和入

○花毛纏 モウル人傳來也大小色々

○女利安 紅毛詞なら故に文字を以て是は袋也

袋綿糸又い其線を漆するあり根本紅毛人長崎女人お作り色々のせん

○次分也

○畦足袋 昔に徳田よりありとて長崎には勝以上方法より貴者甚多あり

○近年いひの如く貴人多くは

○花苴 長崎より花苴を以て藺と赤く黒く漆するあり長さい五間七間廣さ一間二間とて望次第より打なり是と根本

○暹羅人乃傳來あり

○箕盤 根本唐人傳來之長壽より流傳と
今法西より造る故世亦知人あり

○玉細工 蠻人唐人よいつきて傳を傳てよも也
造珊瑚珠 正美く見保り事あり必も吟味

して求し

○外科道具 南蠻紅毛傳廣濃を根本と云

○唐風竹細工 曲録 卓業 ぬぐこ並色々

○唐船大工 唐船又い紅毛船をいさく造るも
賣り多し泉水をふらふるをいさく

○石橋唐風石工 石造り教人あり

○髮紙 二三尺四方より長く廣く漉く色白く
昔は法圃より賣出じと云は近年は賣人とも
かた故多く漉るれは外清帳紙多し
他國よいは敷をとりて作り紙外はたうみ
してまらるるれは多し紙證文より用家
紙たり

○綿り弦 唐人傳來万吉と根本と云右の
唐よりて牛の筋をいさく造れり末代縣乃
筋と云ゆると云わたり

○煙草 蠻人種子と云ありて長壽檜橋る場と

つつと植くより鬱ねく世よりらまわり此
 故く今も桜も傷のをばこの色も香なり
 他那とい各別するもの也は草の日本は東方
 ぬわむらうさつと國わうけぬ一人乃其女
 わりる瓜淡婆姑とい國中の男子は女を
 意をよその甚多うりて死せし好まて世ぬ
 みる心人多くてある時一人乃男子は墓に
 詣ぐに秋の日早く暮ふをれど其恨も
 通夜せしふあましく甚れり何るのわたりを
 擗りしれど草のわうげきあり一毒とてりて

冷やれぬあつらにやも身温くぬ冷風肌へと捉と
 事あつては瘴氣を治ぐ事酒を飲りて
 けあよ南靈草と号し又の煙酒をいあつて
 相思草といつり是より世果萬國は流布に
 一度は煙を吸わると人の思はれんやして
 三つと事わつてと相思草の名最なるれ
 其の毒如た
 能く煙を吸く瘴氣を消し氣力を益し
 山嵐瘴氣を避く冷濕を散り毒を解し
 後に入る毒虫を除く胎の蛇毒を解し法

齒牙堅くは金瘡を毒瓜付く血を止む内障の眼又青盲に好むわさうろうつともしずこ其験をえんと又煙を吸く含を消とくつ

毒の多く煙を吸めると口中損と又上氣耳鳴よとへ一眼病よ可禁但虚眼よいよとつともし多く吸く相火を助くる故り仇也なるべし常に多く吸くは呼吸息と暴くして血脉進數あり故り壽命を減するの怒ありよんや壯年血氣強盛あり人をや痰喘乃人可よとて勞瘵の病よ禁とべし胃火瓜

生し心熱を壯りし

煙の毒瓜解げる方 麥門冬 紫蘘子

瓜蒌仁 枇杷葉 耳艸 己上五味等料し如

常煎一壺くすを去て砂糖一兩を入り服を丸

妙なり

○南瓜 紅毛詞ぐんぐうがうぬとつは種唐土日守

よのふ亞媽港呂宋島の南亞細亞より傳へり

長崎のしん年申より普及し農家み造

り唐人紅毛の賣て生計とすすれども本

草綱目名に毒ありて人よ益ありと云ふ

これぞ思れて世の合する人々もあつじ道徳の
徳國も流布して人毎に合するといふ其害
わらふ事と云ふは民家常に合して朝夕乃
助と云はる是と合して害ありといふは
ありみか肉合は案つて南瓜の案つてハ
わど牛羊猪肉多分加ふ考く是と過食
し又熱酒を飲ふ依り合滞法病を
生と云はる則是南瓜乃毒ありといひて肉
合酒飲乃毒ありし事と案と云ふ家乃
民いそく南瓜一味ありい麦粉餅を合を

考く喰ふといふ過食のどうありなく病家と生
きし事を志すは本草綱目四代までいひまは南
瓜乃性詳く不知者と云ふりしとや都て菓乃
類其形ら小き物よ必と其氣味強く毒あり
もの多し其形ら大なる物の却て氣味弱く
毒なり物多しを瓜付て撰むといふ
○西瓜 是も本草よいなりて戒乃地よりい
る事ありぬとや日本よい丸形は傳へ薩摩肥
後の天草早肥前の島來をふ多く作つて
まより徳國へ弘まりぬ系於て流布する實

承乃比りたりや園東（ハ）又後弘まわりの
け物又人の益多く世乃知くもり也長壽は種
ふも又多し

右乃外菜菓草木の類異國より傳へる長
壽は多き物種く有く其今代に地土も
傳へ弘まりて種くとせらるも又多く種い盡く
化さず

○八升豆 （八升豆） 隠元和尚持来く種子と南条方の
内より人ゆり種より世に流布と此類より隠
元豆といふり又南条豆ともいふは唐の物

入は 天茄 唐菜 芥藍 金紫菜の類甚
多し又南蠻紅毛より傳へる草木多し

○紅毛石竹 （紅毛石竹） らぶ花 げか石竹多し

○ちやか 蠻國乃柑類也之と日本の柚類は
あり合をるをめぐむ切能あり都て垂る
より傳へる柑類長壽は多しおんちやか
との類は皆柚とい橙乃類いそと菓子に合
とる事希たりはか類多し

○赤芋琉球芋 二種一類して赤芋いよて

耳味より赤芋の蔕皮の紅色と七心の甚白く
琉球芋の内外黄色は耳味より田家多く
種々糧として迄年乃飢を脚を脾胃を
補ふ利益尤多し根本長崎よの薩摩より
傳へて今も九州に流布は但寒地よの粟を
ごころ唐人の酒より造り又水花一粉を
取く餅やうらの上品乃物なり

○唐菓子色々 香餅 大胡麻餅 砂糖鳥
羅保衣 香沙糕 大繩餅 胡麻牛皮
玉露糕 賀饅頭 ほか種々し皆唐人傳也

○南蠻菓子色々 ハルテ ケビヤアド カステラポウル
花ポウル コンペイト アルル カルメル ヲベリヤス パスリ
ヒリヨウス ヲブダウス タニコソウメン ビスカウト
パン ほか種々あり

○石火矢 昔は長崎治工鑄りしありと云ふ
つて都て石火矢の事近代の薬師寺某總主
よりて公用の外専りに鑄事と不許軍用
撃發乃は法の薬師寺家傳秘習する人法に
お多し石火矢大小色々皆鐵又いかに金は
唐紙より作る棒火矢とて百目玉よりと云

なるはまゝし紅毛乃石火矢ハ二貫目重なり
く三百目玉もわり又圓崩とて古ありしや
此玉長崎大波土母あり長崎一見乃人うか
らとるる人

石火矢れ文字定りしや 明朝萬曆以来の物
なるゆへ古名あり事れ 百年ら本日奉に
て用家字ありし記と

火鏡

唐の書海外説話に出又
日本羅山文集に出

鳥鏡

鐵炮を云大字に於て
石火矢とす

發煩

日本字林集葉に出

西洋砲

上同書に出砲ハイシハ
ジキト訓ス

○日見様

木の大き圍一丈一尺地より九尺をど

直く立て大枝八方に分き傘とひきくちや
して東西十又回南北十三回本と念ふと十
間くちりも花いぬきん象とて花並ハ一丈乃書と
んふち地とせばよい天正乃は蠻人の播く様
かり寺の櫻谷寺とつり本ハ崎の領地が
寛文乃はより公領とかりぬむの比ハ長崎の
男女じよとある二里乃山路の袖成つる糸都
人わりものころし人わりて詩よ奇よくさはく
糸竹のいぢきかゝ人竹酒盛つたのちもあつり
くげりりて唐土人乃詩をいふ多うりこ

かゝる心もいふごとくおのれをくちあつたる本領
主高力氏直領主松平氏長崎代々の刺使
皆おのれおのれいふいふいふ其の中和奇の一二首
忘れゆく縁いふ家おのれいふ

おのれおのれ高力氏 自筆の懐紙松谷ちり書

都て目見の標をくちいふいふいふいふの埋本

又他人の鉄くち目見標をくち

又くちいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

諺諧發句

目見乃ち花や我おが目よいよいのふ 南元順

花ゆへよ目んとおのれいふいふいふいふ 内田松水

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

右の目見標今いふいふいふいふいふいふいふ

都て人おのれおのれいふいふいふいふいふいふ

又おのれおのれいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

夜話中後叙

頃家父應京師書林之需而使阿弟
 綴長崎夜話中尋許以彫干梓也蓋
 吾鄉也雖在於西極邊鄙之域然逸
 事異談間有聞者亦不寡矣但惜乎
 世之莫敢知焉故嘗舉所聞見者數

件而草之用和字也偏在於欲使童
 蒙鑑既往以發勸懲之意也已
 是家君之志爾

享保庚子孟春吉旦 西川正昌書於省雲齋

京六角通御幸町西入町

茨城多左衛門繡梓

崎陽求林齋西川先生撰述

平安柳枝軒刊行

兩儀集說外書天文義論 三冊

虞書曆象俗解 未刻 三冊

天文和譌注 一冊

幹枝數原 同 二冊

日本水土考 并兩城人數考 一冊

運世年卦考 同 一冊

四十二國人物圖說 一冊

氣運盛衰論 同 一冊

町人囊 并底拂 七冊

天人五行解 同 二冊

長崎夜話 五冊

右旋有無論 同 二冊

水土解辯 三冊

此處有模糊的垂直文字，可能是書名或卷號。



